史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡24

― 総括概要編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1357集

２０１８

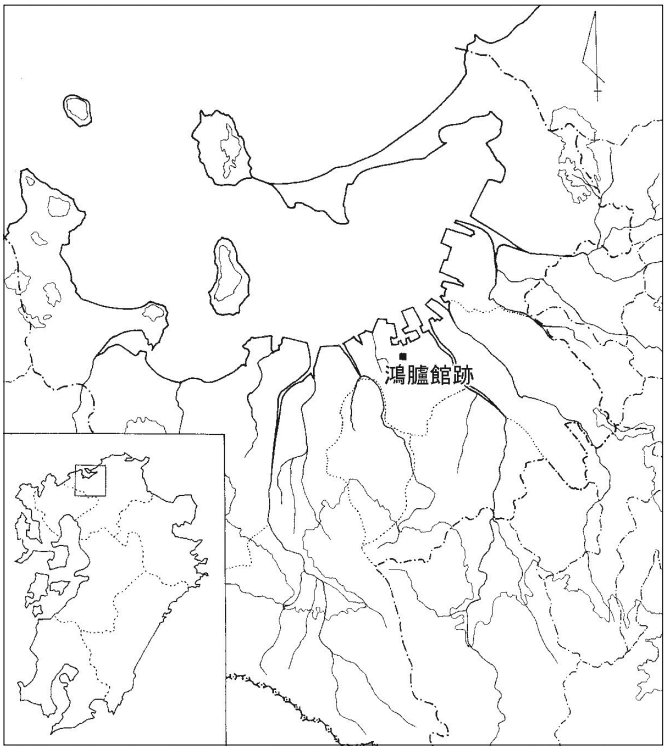
福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡24

― 総括概要編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1357集



２０１８

福岡市教育委員会

序

7 世紀後半に那の津を見下ろす小高い丘を切り開いて造られた筑紫館、のちの鴻臚館は我が国古代の外交施設として、中国・朝鮮半島から来日する使節にとっての玄関口、あるいは遣唐使・遣新羅使等の出国と帰国の拠点としての役割を担っていました。遣唐使の派遣停止など、外交使節の往来が途絶える 9 世紀には、これに替わって「唐物（からもの)」を初めとする唐文化を日本へもたらす中国や朝鮮の商人らの交易の場へと役割が変わって行きました。約 400 年間にわたって日本の古代外交を支えた鴻臚館は、その後土の中に埋もれてやがて福岡城の一部となり、近代には陸軍兵営、戦後には舞鶴公園へとかわり、鴻臚館の遺跡は壊滅したかに見えましたが、昭和 63 年から続く発掘調査によって遺構や遺物が残っていることが分かりました。27 年に及ぶ発掘調査により、鴻臚館には南北二つの施設があったことや東向きに建っていたこと、丘陵を巧みに取り込んだ立体的な構造であったことなどが明らかになり、平成 16 年には史跡福岡城跡三の丸の一角が国史跡鴻臚館跡として二重に指定されました。

鴻臚館跡は日本の古代外交史を考える上で重要な史跡であるとともに、市民にとって貴重な歴史遺産でもあります。鴻臚館を現代によみがえらせ、福岡城跡とともに歴史公園として整備公開していくことが、今求められていますが、 整備を行う上で鴻臚館跡の発掘記録をまとめた調査報告書を作成することが不可欠であるため、福岡市ではこの作業を進めているところです。本書はこれまで報告した「南館」「北館」の調査成果を総括した概要です。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。調査に関わられた全ての方々に対し深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

平成 30 年 3 月 26 日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査報告書である。
2．鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２（1990）年度から継続して刊行しており、本書が 24 冊目であるが、『鴻臚館跡Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 315 集）、及び『鴻臚館跡 18 ～ 23』（同第 1022・1175・1213・1248・1300・1326 集）を除き概要報告書である。
3．本報告書の刊行については、調査が長期にわたり相当の分量があるため分割刊行しており、遺構の性格により区分した「谷部分」（鴻臚館跡 18）、「南館部分」（鴻臚館跡 19 ～ 21）、「北館部分」（鴻臚館跡 22、23）の順に刊行している。（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している。）
4．本書は上記の本報告書の内容を総括した概要編である。
5．鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
6．本書に使用した遺構実測図、遺物実測図の作成は、大庭康時・吉武学・池崎譲二・菅波正人・田中克子・吉岡涼子・熊埜御堂和香子が行った。
8．本書に使用した写真は各年度の調査担当者が撮影した。
9．本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Ｙ軸）を示し、この地域では真北より 0° 19′ 西偏し、磁北より 6° 02′ 東偏する。
10. 文中の軒瓦の型式は、「大宰府史跡出土軒瓦･叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館 2000 による。
11. 図中の瓦分類番号は「鴻臚館跡 21」福岡市教育委員会 2014 の叩き文様分類に拠る。
12. 本書の編集は菅波が行った。
13. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

目　次

１．はじめに……1
　（１）調査の歴史 ……1
　（２）鴻臚館の歴史的位置づけ ……1
２．調査の概要……2
　（１）位置と環境 ……2
　（２）遺構の変遷 ……6
　（３）出土遺物から見た鴻臚館 …… 15
３．おわりに…… 23

1．はじめに

(1) 調査の歴史

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ 「万葉集　巻一五　三六五五」

この歌は 736 年（天平 8)、筑紫館に滞在した遣新羅使の一行が故郷を思い詠った 4 首の内の一つである。筑紫館は筑紫の鴻臚館の前身施設であり、江戸時代以来、鴻臚館は現在の博多部（官内町＝中呉服町付近）に所在したとされてきた。1915 年（大正 4)、九州帝国大学医学部の中山平次郎は、遣新羅使の一連の歌から想定される風景は博多部にはなく、福岡城をおいて他にはないと考え、それを実証すべく、当時軍の施設があった城内に調査に向かう。市民に開放されるドンタクの２日間の調査で、古代の瓦を採集する等の成果を得て、中山は説を補強した。

戦後になって、中山が推定した鴻臚館跡は競技場建設等により、破壊の危機に晒されることになるが、1950 年（昭和 25）頃から城内の開発工事の折り、中山に私淑していた高野孤鹿や大場憲郎が、大量の瓦や越州窯系青磁等の遺物を採集した。また、1951 年（昭和 26)、平和台野球場南側のコートの造成に伴う発掘では鴻臚館の遺構の一部と考えられる礎石や奈良・平安時代の古代瓦や越州窯系青磁等が出土した。これらの成果から城内に鴻臚館跡が存在したことは疑いのないものとなったが、鴻臚館跡は既に破壊されたと考えられた。しかし、1987 年（昭和 62)、当時の野球場の改修工事に伴う発掘調査で、大規模な建物の跡や大量の瓦、輸入陶磁器などが発見され、遺構が残っていることが分かった。以来、計画的に行われた確認調査で、南北に並ぶ施設の構造や新羅土器や中国産陶磁器、イスラム陶器などの多彩な交易品などの様相が明らかになり、古代の国際交流の拠点であった鴻臚館の往時の姿がようやく浮かび上がってくることになった。

(2) 鴻臚館の歴史的位置づけ

鴻臚館とは、平安時代初期に外国からの賓客を接待し、滞在させるために平安京、難波、筑紫の 3 ヶ所に設けられた客館（迎賓館）である。筑紫の鴻臚館（以後、鴻臚館）の前身は、『日本書紀』持統天皇二年（688）に初出する「筑紫館」とされ、設置の経緯は朝鮮半島における白村江の敗戦（663 年）後、唐や新羅に対する防衛、外交政策に伴うものと評価される。

外国の使節が来航するとそれに臨み、朝廷にその来意が報告され、鴻臚館において使節を収容し衣食を提供した。また、わが国から唐や新羅に派遣された使節は、鴻臚館で風待ちし、九州沿岸を西航、船出して行った。筑紫の鴻臚館は、内外使節の出入国窓口として大きな役割を負ったといえる。

9 世紀になると、施設の名称は鴻臚館に改められたようで、史料の上でも天安二年（858)「鴻臚北館門楼」、貞観三年（861)「鴻臚北館」などが見られる。この頃、唐・新羅との外交使節の往来は途絶え、9 世紀前半には新羅商人、後半以降は唐商人の来航が増加していった。商人が来航すると大宰府から朝廷に報告され、朝廷の判断を待って鴻臚館に入館させる。その後、鴻臚館に唐物使が派遣され、唐物の検査・選別・購入が行われ、国家の優先的な交易（官司先買）が行使されることになる。こうして、鴻臚館は次第に中国商人らによる滞在・交易の場へと変容していく。それに伴って、わが国から入唐を目指す僧らも、鴻臚館にいったん入って機会を待ち、中国商人の船で中国に渡航するようになる。

鴻臚館は貿易の最前線となった一方で、海賊などのリスクを負うことになる。9 世紀後半の新羅海

賊の入寇により、兵員や武器が配置され、「博多警固所」の設置に至る。鴻臚館は出入国窓口、交易機能に加え、博多津の防備といった、いわば国防機能も担うことになる。

鴻臚館は、7 世紀後半から 11 世紀前半まで、わが国の古代を通じて対外交渉の窓口であり続けた唯一の施設である。その役割も外交から交易の窓口に変わり、それに伴って博多津の防備が強化されて、防衛の最前線になっていく。また、名称も時代とともに変わり、筑紫館→鴻臚館→鴻臚所→（蕃客所）→大宋国商客宿房と呼ばれた。

11 世紀中頃以降、『扶桑略記』の永承２年（1047）の「大宋国商客宿房」放火犯人捕縛の記事に対応するように、鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となることから、施設の再建はなされなかったと考えられる。廃絶後、貿易の拠点は博多遺跡群に移り、「博多津唐房」と称された地区に居住した中国商人により、交易が行なわれる。中世最大の貿易都市博多の隆盛が始まる。

2．調査の概要

（1）位置と環境

鴻臚館跡の立地する場所は、南の「大休山」から博多湾に伸びる「福崎」と呼ばれた丘陵の先端にあたる。この丘陵は早良郡と那珂郡の境界をなす。丘陵の先端は南東～北西方向に伸び、現在の福岡城の天守台と本丸北側、御鷹屋敷の 3 ケ所に丘陵の頂部がある。鴻臚館の時代は、丘陵西側は「草ヶ江」の入江で、その対岸は「荒津山」に向って砂洲が伸びていた。荒津山の裾部の海は水深があり、古代には大型船の停泊地になったと考えられる。東側は那珂川下流の入江となっていたと想定されており、現在、この入江の南東隅にあたる場所に式内社の住吉神社が存在する。また、その北東側の砂丘上には鴻臚館との関連が想定される博多遺跡群が立地する。博多遺跡群は弥生時代以来、奴国の海上交易の拠点であり、古代では鴻臚館に関連した官衙の存在が指摘されている。大宰府と鴻臚館、博多の間には水城の東側と西側からそれぞれ伸びる官道があり、両者はその結節点となっている。湾内は大型船の停泊は困難であるが、河口には艀等の船着き場が存在したと考えられる。

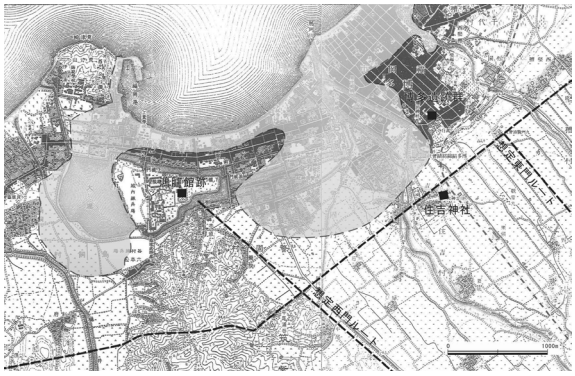


Fig.1　鴻臚館跡周辺旧地形及び官道推定図

Fig.2　鴻臚館跡旧地形復元図

鴻臚館（筑紫館）は本丸北側から東側に枝分かれした小丘陵を二つの平坦地とした場所に造営される。鴻臚館の東側は谷部を経て小さな丘陵があり、その周辺は沖積地が広がっていたと推定される。鴻臚館北辺は丘陵先端から 4m 以上崖下に海浜砂丘があり、古墳時代前期の蛸壺なども出土している。この砂丘は海に向かって浅く窪んだのち高まり、遠浅の海に続いていたと考えられる。鴻臚館の東側から南東側も同様の段差があり、この形状は造営以来、踏襲されることになる。両側を入江で挟まれた丘陵の先端に立地した鴻臚館は、郡境にあたり、郡の中心施設や駅家などとも一定の距離があった。しかも出入りする者を監視しやすい場所にあり、隔離性、防備性を備えた施設であったと言える。

Fig.3　鴻臚館跡調査地点全景（デジタルモザイク合成）

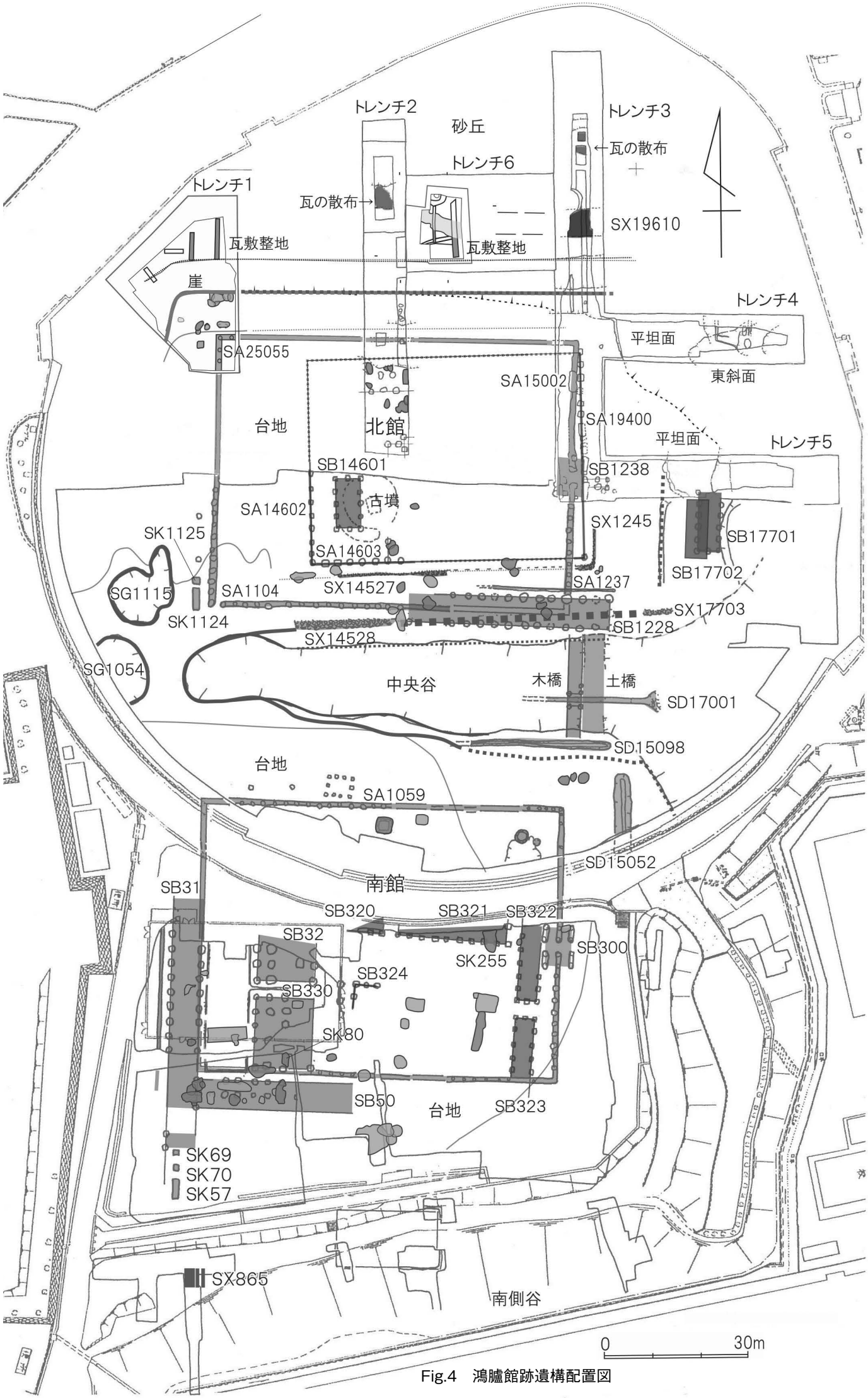


Fig.4　鴻臚館跡遺構配置図

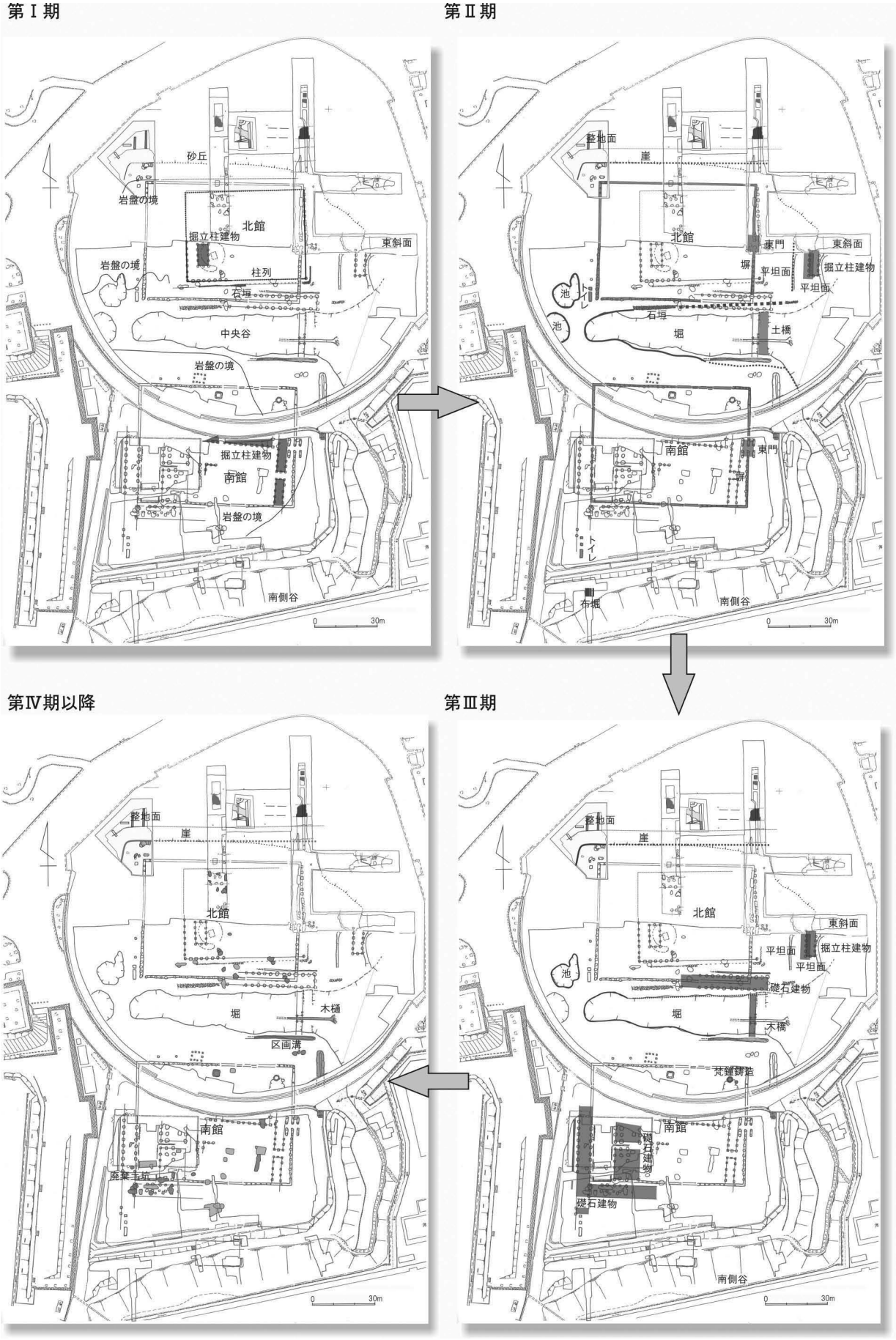


Fig.5　鴻臚館跡遺構変遷図

（2）遺構の変遷

鴻臚館跡は、昭和 62 年の平和台野球場改修に伴う発掘調査以来、26 年間に及ぶ調査で、7 世紀後半～ 11 世紀前半までの存続期間と第Ⅰ～Ⅴ期までの 5 時期の遺構変遷を確認した。

①　第Ⅰ期（7 世紀後半～ 8 世紀前半）

第Ⅰ期は、丘陵に入り込む谷で南北に隔てられた施設（以後、それぞれを南館、北館と呼ぶ）が造営される。南館、北館とも掘立柱建物で構成される。瓦の出土が見られないことから、屋根は板葺と考えられる。北館では石垣（SX1245 ほか）と長方形に巡る柱列（SA14602 ほか）を検出した。石垣は柱列に南辺と南東コーナーに沿って積み上げられている。南東コーナーでは 7 石が積まれ、高さ約 160cm を測るが、北側と西側に向って次第に段数を減らし、両端では 1 ～ 2 石となる。柱列の主軸方位はＮ－ 1° 30′ －Ｗをとり、復元規模は東西約 54m ×南北約 39m となる。柱列の内部は 2 × 4 間の側柱建物を確認した。柱列の東側では門の一部と考えられる柱穴群を検出した。南館は北館より約 1.5 m 高い場所にあり、ここでは主軸方位Ｎ－ 5°－Ｅをとる、梁間 2 間、桁行 5 間以上の側柱建物の南北棟 1 棟（SB322）と柱筋をそろえる同様の建物 1 棟（SB323）を検出した。また、それらに直行する、2 × 9 間の東西棟 1 棟（SB321）と柱筋をそろえる同様の建物 1 棟（SB320）を検出した。更に、南北・東西棟に内側で建物 1 棟（SB324）を検出した。

第Ⅰ期は後世の造成により、不明確な点も多いが、南館と北館では建物等の主軸方位や構成が異なっていることが分かる。検出した建物の状況から、南館建物群は長舎建物をロの字形に配置したものであったと想定される。内部にある建物は中心建物であった可能性が高い。北館は建物を塀で囲むもので、内部に数棟程度の建物が想定される（Fig.6）。

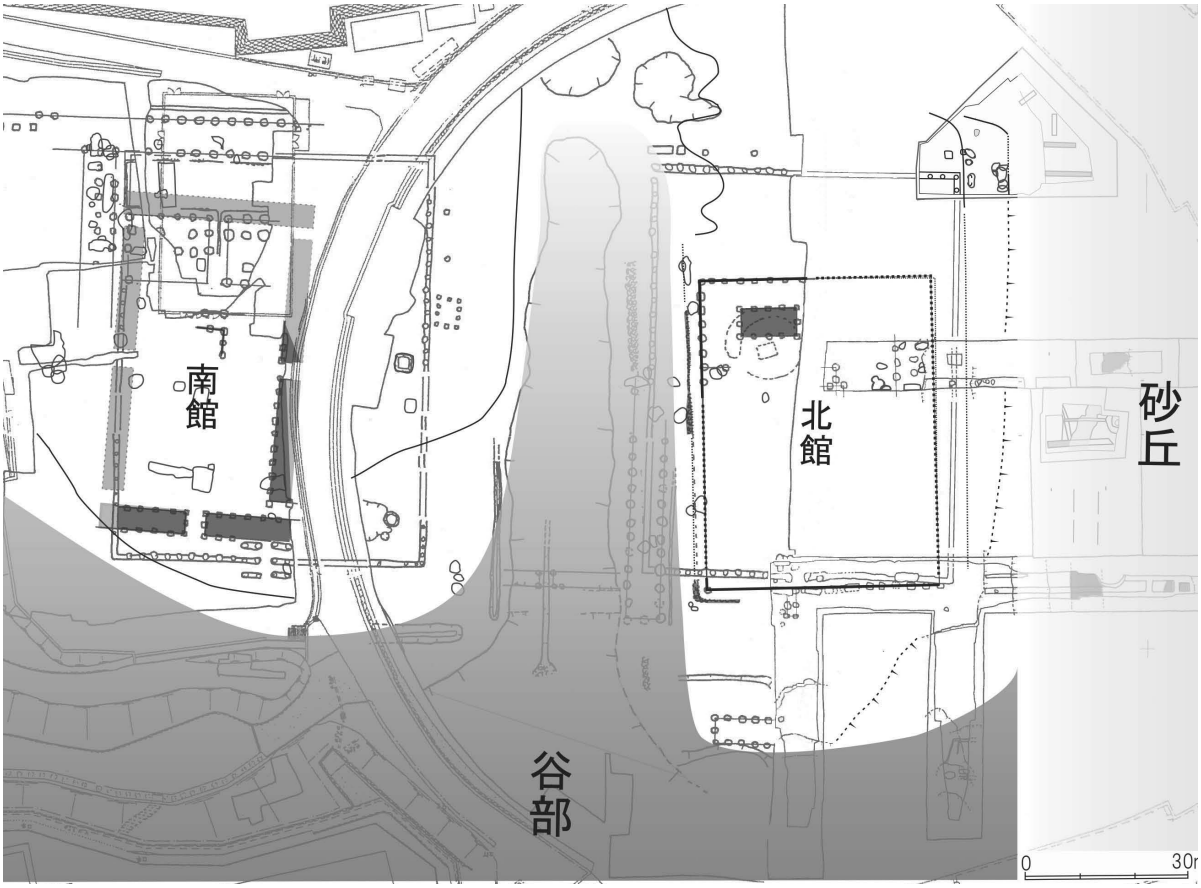


Fig.6　第Ⅰ期建物配置復元図

遺構や地形などを考慮して復元すると、南館は東西長約 52m、南北長約 37m の規模と推定される。建物構成に注目すると、長舎建物が中心建物を取り囲む構造は初期の郡庁の建物配置に類似する。郡庁は政務の実務的な場である一方で、儀式や饗宴の場としての機能も想定されている。また、時期はさかのぼるが、7 世紀中ごろの斎明朝の饗宴施設とされる奈良県石神遺跡の A3 期東区画建物群は、四面庇の中心建物を長舎で取り囲む構造で、饗宴施設の建物配置モデルとして取り上げられている。これらの事例を参考にすると、第Ⅰ期の南館には儀式や饗宴施設の機能を想定できる。一方、北館の構造は建物を塀で取り囲むものであり、その構造から部外者との接触が避けられた外交使節が滞在する館（宿舎）の機能を想定できる。つまり、海側に近い北館は宿舎であり、一段高い位置にある南館は儀式や饗宴施設となり、外交使節の宿泊、管理、饗応の機能を備えた施設の姿が浮かんでくる。

天武朝（672 ～ 686 年）から持統朝（687 ～ 697 年）にかけて、新羅使などの使節が頻繁に来朝しているが、天武 8 年（679）から持統 4 年（690）の間は入京せずに筑紫で饗応を受け、帰国している。筑紫での外国使節の饗応は京から遣わされた使者により行われ、朱鳥元年（686）には川原寺から伎楽の衣装なども運ばれている。持統２年(688)には新羅使金霜林らを饗応した施設として筑紫館が『日本書紀』に登場するが、おそらくそれまでに外国使節に係わる制度面や施設面での整備が行われ、筑紫においてこの段階に整ったものが筑紫館であり、先に示した構造の施設であったと推測する。

② 第Ⅱ期（8 世紀前半～末）

第Ⅱ期は、敷地を広げるため、凡そ南北二町、東西一町の範囲を大規模に造成し、規格性の高い建物配置を行う。南北を隔てる谷は埋め立てにより狭められ、幅約 20m の堀となる。堀の開口部では土橋を確認しており、南北の施設の連絡路と考えられる。北館の南側では盛土造成を行い、谷の北側斜面に石垣（SX14528）（Fig.7、9）が築かれる。高さ約 4.2m を測り、下部の 1.5m は 80° 前後でほぼ直に、上部は 55° 前後の勾配をもつ。石材は礫岩や玄武岩が用いられている。裏込め石や版築はなく、盛土しつつ積み上げられたと考えられる。北館の北側は、盛土造成で第Ⅰ期より北側に約 10m 平坦面を広げて高さ約 4m の崖面を形成し、拡張した平坦面には布掘り塀が設けられる。崖下には砂丘面に瓦を敷いて、幅約 10m の盛土造成を行っている（Fig.8）。

南館、北館は柱芯間で東西長約 74m、南北長約 56m の長方形区画の布掘りの塀（SA1059、SA1104 ほか）が巡り、

Fig.7　北館石垣 SX14528 全景（南西から）

Fig.8　北館北側崖面検出状況（北から）

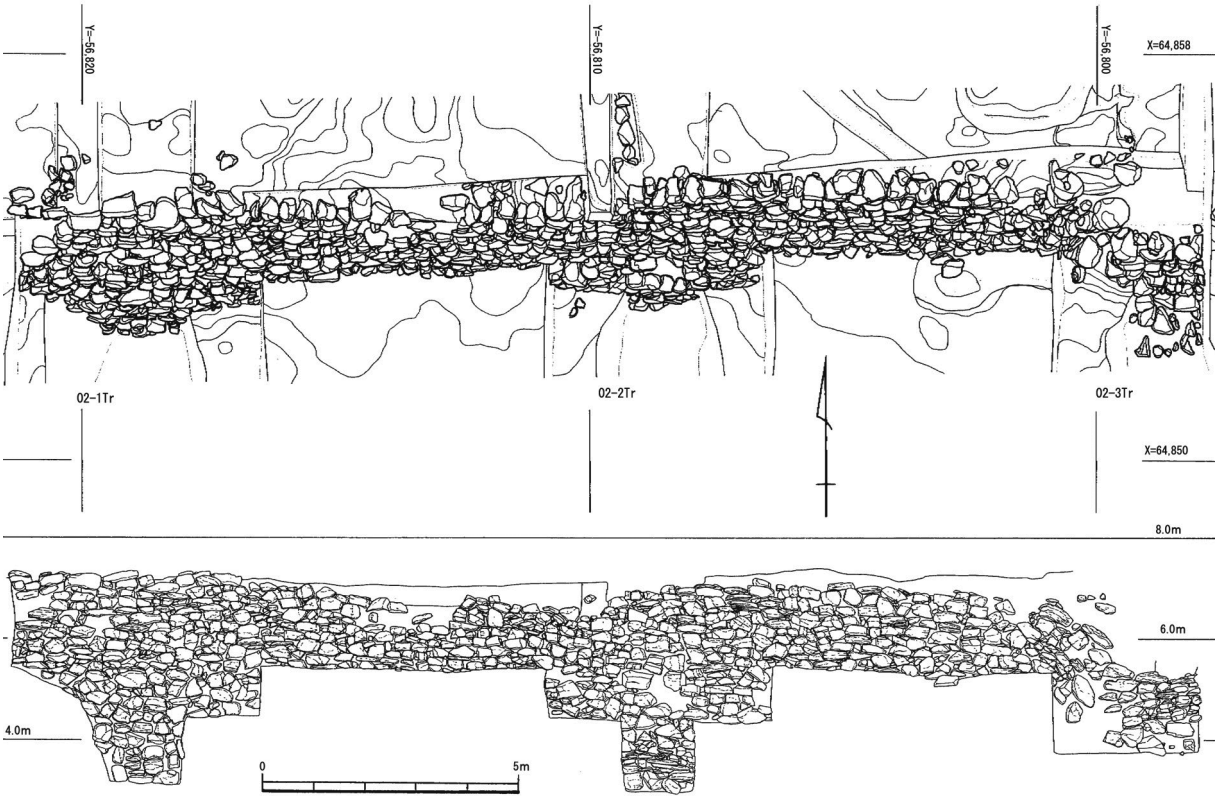


Fig.9　北館石垣 SX14528 遺構実測図

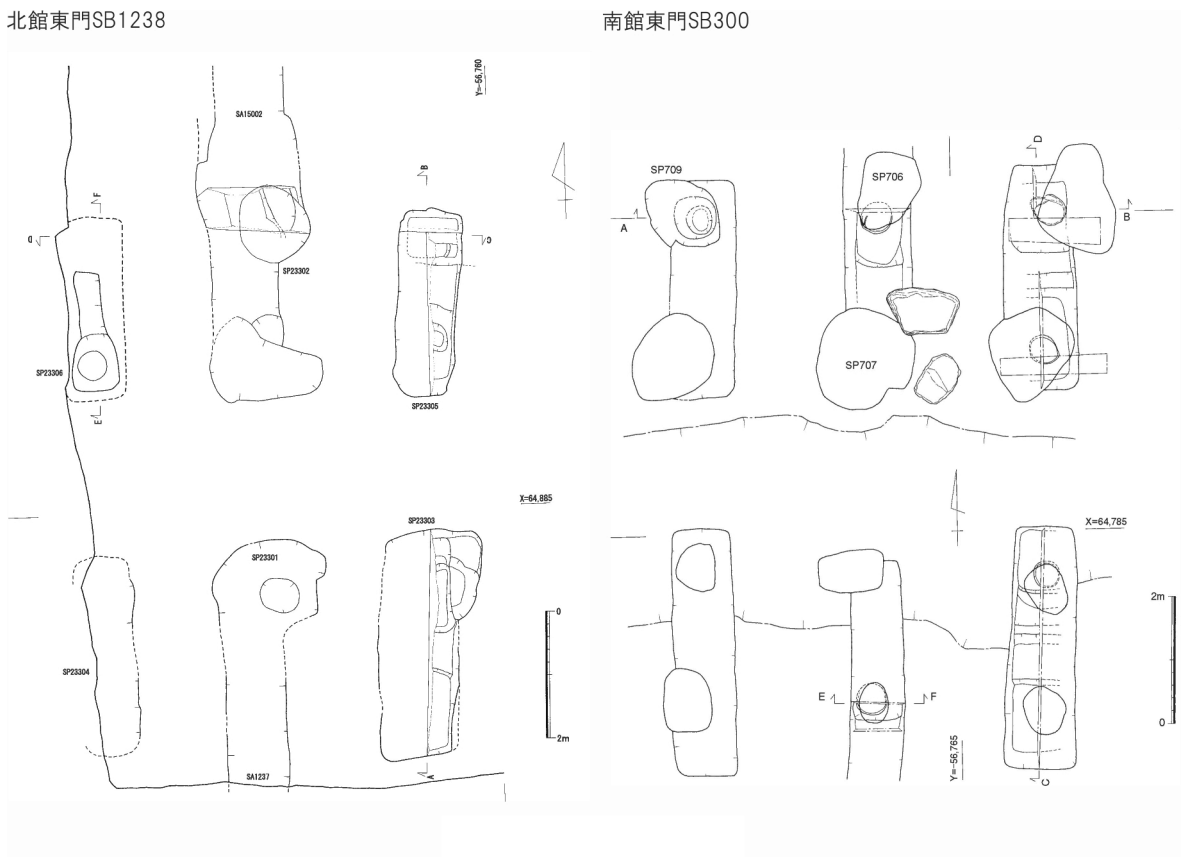
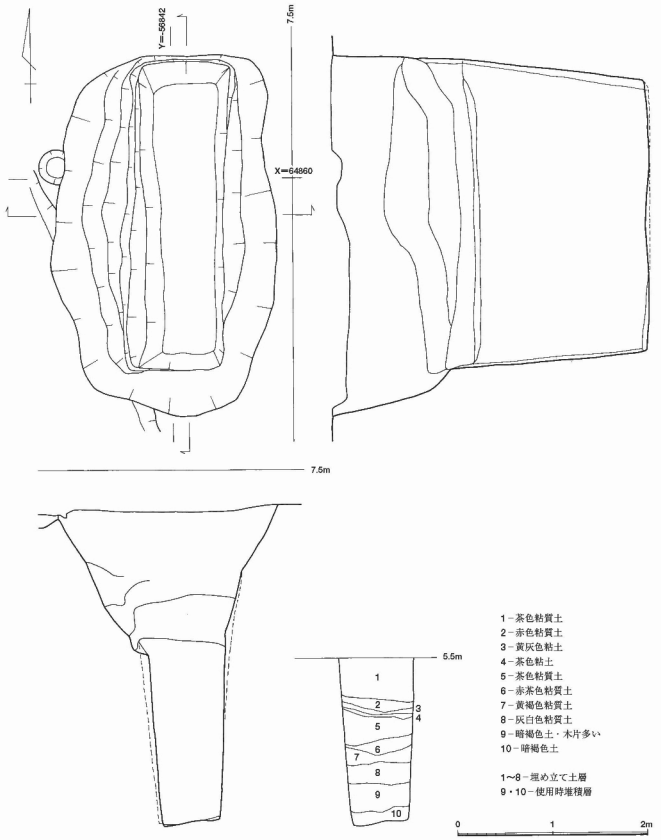
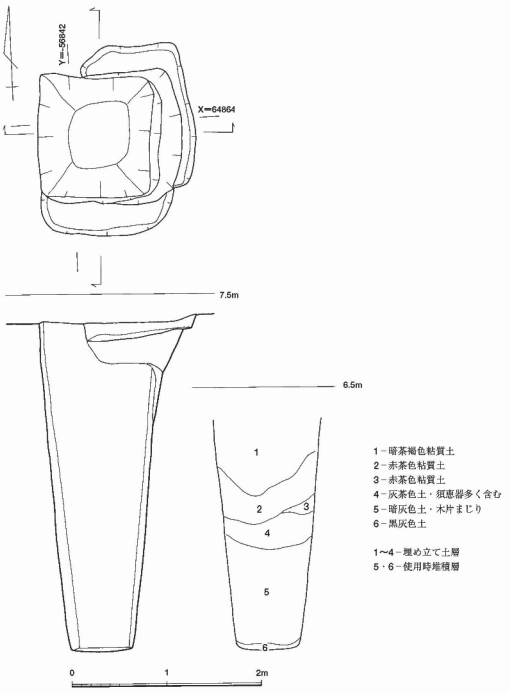


Fig.10　東門遺構実測図

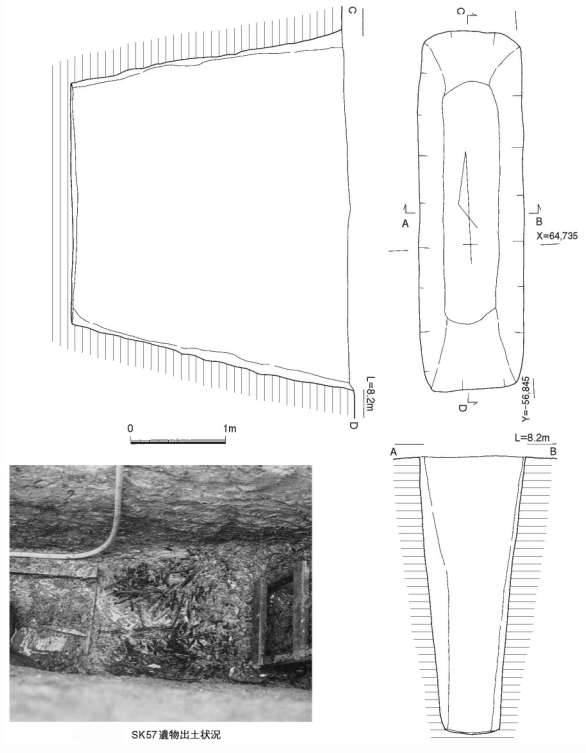
北館SK1124



北館SK1125

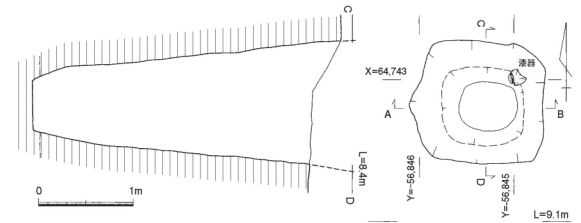


南館SK57

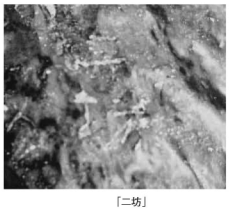


SK57遺物出土状況

南館SK69



SK69漆器膜出土状況



「二坊」

Fig.11　便所状遺構実測図

東側に八脚門（SB300、SB1238）（Fig.10）が付く。塀の主軸方位はＮ－1° 30′－Ｅをとる。門は梁行 5.3m ×桁行 7.5m、中央間 3.5m を測る。北館の門の東側は幅 20m 程の平坦面があり、そこから一段下がる場所に 2 × 5 間の掘立柱建物（SB17701）があり、門の中軸にも沿うことから、使節等の出迎えや警備に関わる施設と考えられる。塀の内側では建物の柱穴や礎石は確認できず、削平で失われたと推測されるが、鴻臚館式軒瓦が葺かれた建物であったと考えられる。

建物以外の遺構では、北館の南西隅外側で 2 基の便所状遺構（SK1124、1125）、南館の南西隅外側で 3 基の便所状遺構（SK 57、69、70）（Fig.11）を検出した。平面形は隅丸長方形プラン（SK57、1124）と隅丸方形プラン（SK69、70、1125）のものがあり、前者は長さ約 3.3 ～ 3.8m、幅約 1.1m、深さ 2.9 ～ 3.4m を測る。後者は一辺約 1.2 ～ 1.4m、深さ 3.0 ～ 3.5m を測る。本来の深さは 4m ほどあったと考えられる。坑内は床面から 1.5m 程の厚さで、籌木や食物残滓などを含む排泄物が堆積する。排泄物の中に含まれる種子や花粉、寄生虫卵の分析からウリ、ヤマモモ、ナツメ、ミズアオイ、アブラナ、コイ、アユなどが食されたことが想定されている。その内、南館の SK69、70 からはブタやイノシシなどの寄生虫卵が出土しており、肉食を常食とする外来者（新羅使）が使用した可能性が高いと想定されている。南館の SK57 では籌木として転用された荷札木簡があり、京都郡や天草郡といった地名などが記されていた。便所状遺構はこの時期だけに見られる特徴的なものである。

南館と北館は同一主軸、同一規模の相似形をなすものであるが、造営の時期に若干の差が認められる。南館の布掘り塀と便所遺構の造営時期は 8 世紀前半～中頃に比定される。一方北館は、石垣の推定ラインが布掘り塀と交差することと、布掘り塀が掘り込まれる盛土との関係により、石垣は 8 世紀前半の築造、石垣に後出する布掘り塀は、8 世紀中頃～後半に造営されたと考えられる。

つまり、第Ⅰ期の長舎建物から変わる形で、南館が先行して布掘り塀とそれに伴う施設が造営される。8 世紀前半～中頃に造営される南館は、第Ⅰ期の北館と同様、塀による区画施設をもつもので、宿泊施設として整備されたと考えられる。この時期、大宰府政庁の整備や外交使節に対する客館の整備も行われており、それらに連動するものと考えられる。ただし、新羅使の来朝はあるものの、筑紫館での饗宴の記事は見られないことから、饗宴については大宰府で行われ、筑紫館は安置、供給が主たる役割になったと考えられる。その後四半世紀ほど遅れて、南館の方位、規模を踏襲する形で北館が造営され、その際に中央谷の石垣の埋め立てと北側の拡張が行われたと考えられる。この段階で南北が同一主軸、同一規模の相似形の施設となるが、便所状遺構の出土遺物などから 9 世紀を前後する時期まで継続した可能性がある。第Ⅱ期に見られる大規模な盛土造成や統一された規格・構造の施設の造営には、新羅や渤海との外交政策が背景にあるものと考えられる。

③　第Ⅲ期（9 世紀初～後半）

第Ⅲ期は、乱積みの基壇を持つ礎石建物が設けられた時期で、第Ⅱ期の主軸方位Ｎ－1° 30′－Ｅを踏襲しながら、建物の規模が拡大する。第Ⅲ期の堀は埋め立てにより狭められる。Ⅱ期の石垣は埋められ、土橋は木橋に変わる。全体に遺存状況は悪いが、比較的残りの良い南館の西南側では、軒を連ねた身舎 2 間で、東西に庇が付く南北棟 2 棟（SB32、330）、その西側に梁間 2 間、桁行 16 間（48m）以上の南北棟 1 棟（SB31）、それに直行する梁間 2 間、桁行 7 間（21m）以上の東西棟 1 棟（SB50）とそれに伴う雨落ち溝（Fig.12、13）を検出した。これらの建物配置から、第Ⅱ期の建物方位や中軸線を踏襲した回廊状の建物とその内部に長大な南北建物を配置したものが復元される。北館では南東側でⅡ期の布掘り塀の南辺に重なるように梁間 2 間、桁行 14 間（42m）以上の礎石建物の東西棟 1 棟（SB1228）を検出した。削平のため遺構の残りが悪いが、南館同様に回廊状の建物が想定され、

Fig.12　南館礎石建物 SB31・32・330 全景（南から）

南館より南北の長さが一回り小さい復元案が示されている（Fig.14）。文献史料にはこの時期に当たる天安 2 年（858）、唐から帰国した円珍にむけての唐海商の送別詩の題に「鴻臚北館門楼」という記載があり、この時期の北館は重層の門であったと想定される。

第Ⅲ期の年代は布掘り塀との関係と南館での建物に掘り込まれた廃棄土坑との年代から想定されたものであり、布掘り塀が 9 世紀前後まで存続したとすると、造営時期は 9 世紀初頭と考えられる。廃絶の時期は廃棄土坑の年代である 9 世紀後半に位置付ける。

第Ⅲ期は第Ⅱ期の規格を踏襲し、南北の規格に若干の違いはあるものの、規模が拡大する。新羅の外交使節が途絶え、鴻臚館の主な役割が商人との取引に変わることもあり、規模拡大の背景については検討すべき課題である。第Ⅲ期開始期の弘仁年間（810 ～ 824）は、施設の名称を中国風に呼び変える時期であり、それに連動することも考慮する必要がある。

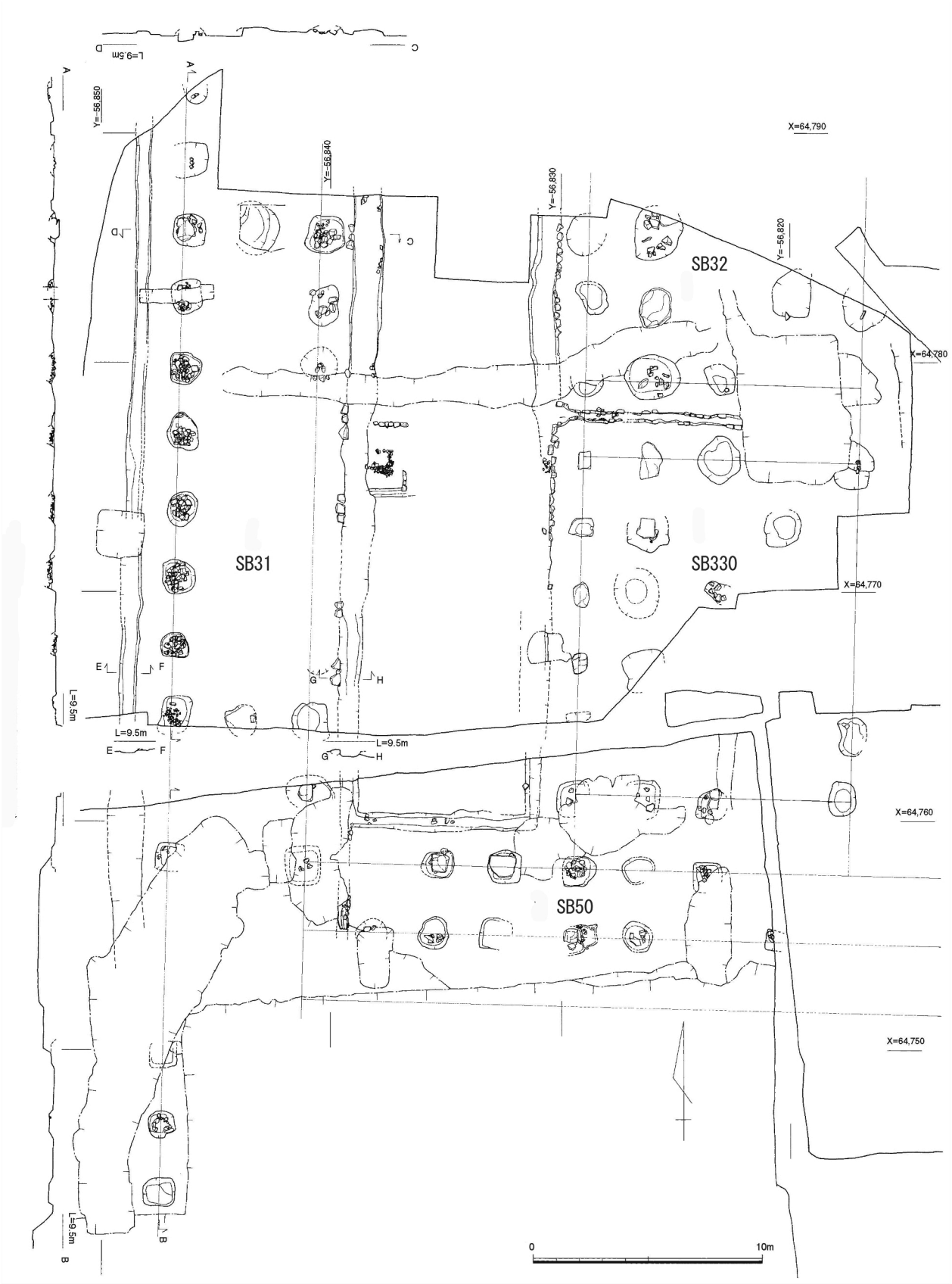


Fig.13　南館礎石建物 SB31・32・330・50 平面図及び SB31 断面図

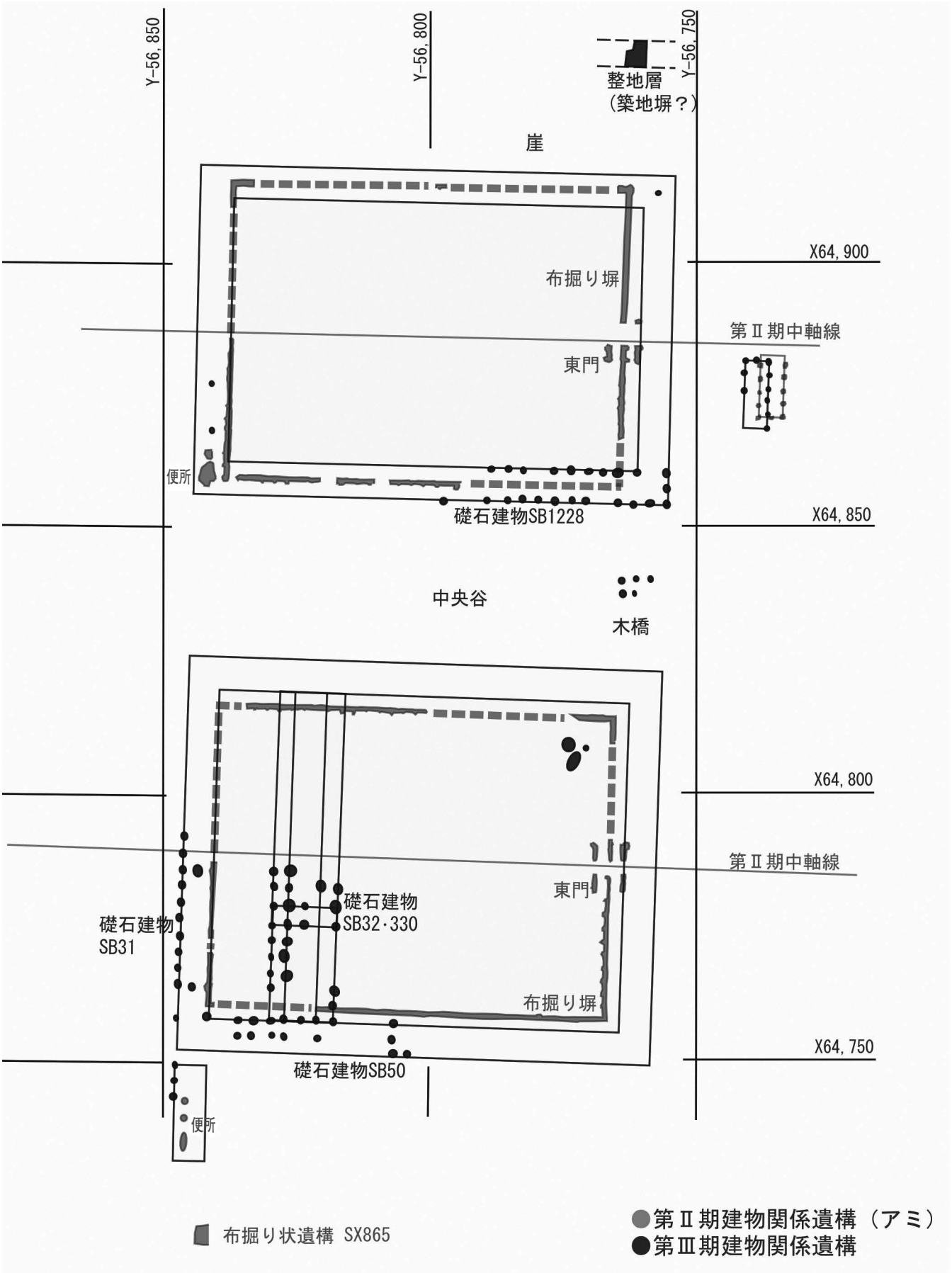


Fig.14　第Ⅱ期、第Ⅲ期建物群の変遷比較

④　**第Ⅳ期以降（9 世紀後半～ 11 世紀前半）**

第Ⅳ期以降は、中国商人の来着の記事が多くみられ、この場所が唐物の取引の場として、活況を呈していたと推測される。ただし、建物遺構の遺存状況は悪く、施設構造は不明確である。しかし、瓦類は多量に出土しており、特に 10 ～ 11 世紀代の特徴を示す瓦も多く含まれることから、瓦葺き建物が存在したことは確かであろう。第Ⅳ期（9 世紀後半～ 10 世紀前半）と第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）は主に廃棄土坑の出土遺物から時期区分している。

廃棄土坑は、南館では多量の越州窯系青磁等の貿易陶磁器を廃棄したものを検出した。貿易陶磁器、特に越州窯系青磁が大量に出土した土坑は、SK38・56・61・75・80・82・255、及び SK246 がある。いずれも第Ⅳ期に属するが、出土した陶磁器が二次的に火を受けていることから、倉庫等に保管されていた商品が火事にあい、一括投棄されたものとみられる。これらの土坑から出土した越州窯系青磁の組成には顕著な差が認められる。ひとつは福建省産とみられる粗製の越州窯系青磁（B 群）が過半数を占める土坑で、特に B 群の碗が大半を占める SK80（Fig.15 の左）の構成は特異である。もう一つは産地や器種にバリエーションがあり、複数の産地の様々な器種を集めたような構成で、SK56、255（Fig.15 の右）等が相当する。また、第Ⅴ期の SK160･208 からも相当量の遺物が出土しているが、破片の状態で廃棄されており、完形品が少ない。廃棄の様相が異なるものと考えられる。一方で、北館においてはそのような廃棄土壙はほとんど見られず、完形の土師器坏や碗を多量に廃棄した土坑が

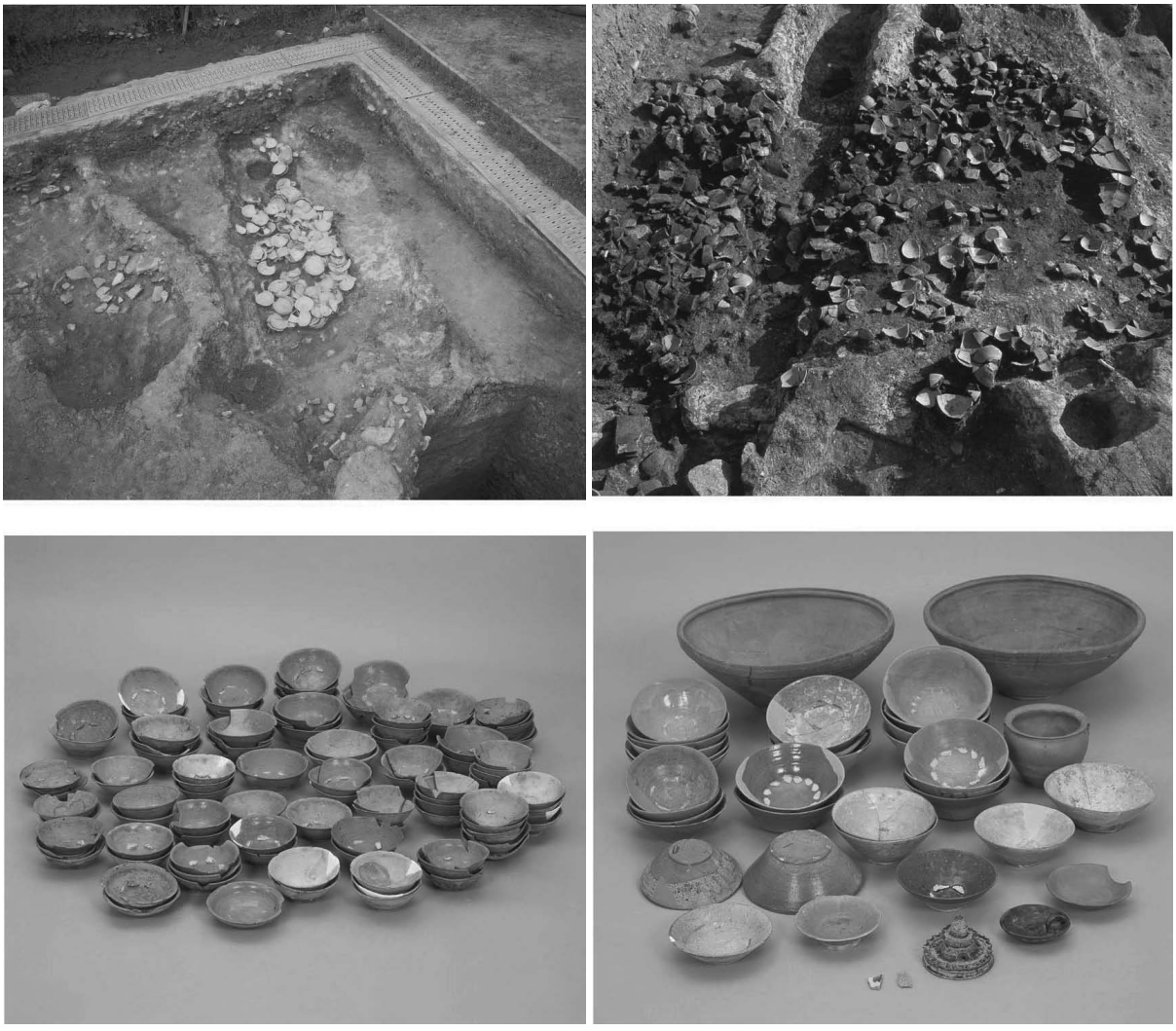


Fig.15　第Ⅳ期廃棄土坑遺物出土状況及び出土陶磁器類（左：SK80、右：SK255）

多く見られた。

鴻臚館跡で出土する軒瓦は鴻臚館式（丸瓦 223 型式、平瓦 635 型式）が大半で、それに軒丸瓦 082A 型式、082B 型式、軒平瓦 662 型式、663 型式が加わったものが主たる所用瓦となる。10 世紀～ 11 世紀に位置づけられるものは少量であるが、軒丸瓦 049 型式と軒平瓦 605 型式がある。これらは主に北館で見られるもので、南館ではほとんど出土しない。第Ⅳ期以降、施設造営は北館に力が注がれたことが想定される。

廃棄土坑の様相や瓦の出土状況から南北の機能の差を窺うことができ、南館には貿易陶磁器類の管理や取引、北館には宴会や飲食、宿坊といった役割が想定できるのではないかと考える。

鴻臚館の外郭に関して、トレンチ 3 下層調査で検出した SX19610（Fig.4）は塀の積土もしくは積土が崩壊堆積したものと推測されている。ここから出土した遺物には越州窯系青磁五輪花大碗のほか、単線斜格子叩きの瓦や女原瓦窯跡（9 世紀中頃～ 10 世紀前半の操業）で焼成された瓦の特徴をもつものがあり、第Ⅳ期以降に位置づけられている。この遺構は西側のトレンチ 6、トレンチ 1 では確認されておらず全容は不明であるが、第Ⅴ期まで継続したと想定される。なお、第Ⅱ期、Ⅲ期の外郭を示す遺構については確認されていない。第Ⅳ期以降の鴻臚館の役割は外交施設から中国商人との取引の場と変わり、合わせて新羅海賊などへの防備も強化される。貞観 11 年（869）5 月 22 日に、新羅海賊に豊前国年貢の絹綿が略奪されたことに対応して、同年 12 月には鴻臚館へ統領 1 人・選士 40 人、甲冑 40 具、翌年正月には甲冑 110 具を移している。また、延喜式には大宰府の兵馬 20 疋のうち、10 疋、牧馬 10 疋を分置するとあり、防備の拠点強化も進められている。それらのことから、ここで想定された外郭施設も外交施設としての外観より、防備を重視したものの可能性も考えられる。

鴻臚館の最末期である第Ⅴ期では中国商人の滞在が、6 ～ 8 年という長期にわたる例もあり、周文裔や章承輔などの商人は日本人妻を持ち、その間に生まれた子が日宋貿易に関わったとされる。来航の年数を規定する年紀制により、規定年数まで居住してわずかの年数の帰国で再び来航するという形態で貿易を行うものが現れた結果、鴻臚館では常駐化する中国商人がいたと想定される。この時期に見られる「綱」「呉」「李」「鄭」などを墨書した陶磁器の存在がその傍証と言えよう。このことは後の博多における「住蕃貿易」に繋がるものとして評価されている。

11 世紀中頃以降は、『扶桑略記』永承 2 年（1047）の「大宋国商客宿房」放火犯人捕縛の記事と整合して、鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となり、焼失した鴻臚館は再建されなかったと考えられる。ただし、史料と考古学的な変遷とではまだ、整合性の取れていない点も多い。11 世紀中ごろ史料である藤原明衡『雲州消息』下末所収文書に見られる「客館」「鄭十四客房」や『香要抄』にある「唐人王満之宿坊」などは鴻臚館焼失記事の後のものであり、その場所が鴻臚館であるか博多であるかの検証が必要である。

（3）出土遺物から見た鴻臚館

鴻臚館跡ではこれまでの調査により、コンテナ約 1 万箱出土している。その中には大宰府の附属機関として、外交・交易を担っていたことを物語る多様な遺物が見られる。

①　瓦類（Fig.16）

鴻臚館は大宰府の附属機関であり、出土した軒瓦は大宰府史跡で出土したものとほぼ一致する。瓦には軒瓦、鬼瓦のほか、ここでは図示していないが、平瓦や丸瓦、熨斗瓦や面戸瓦といった道具瓦や磚などが多数出土している。

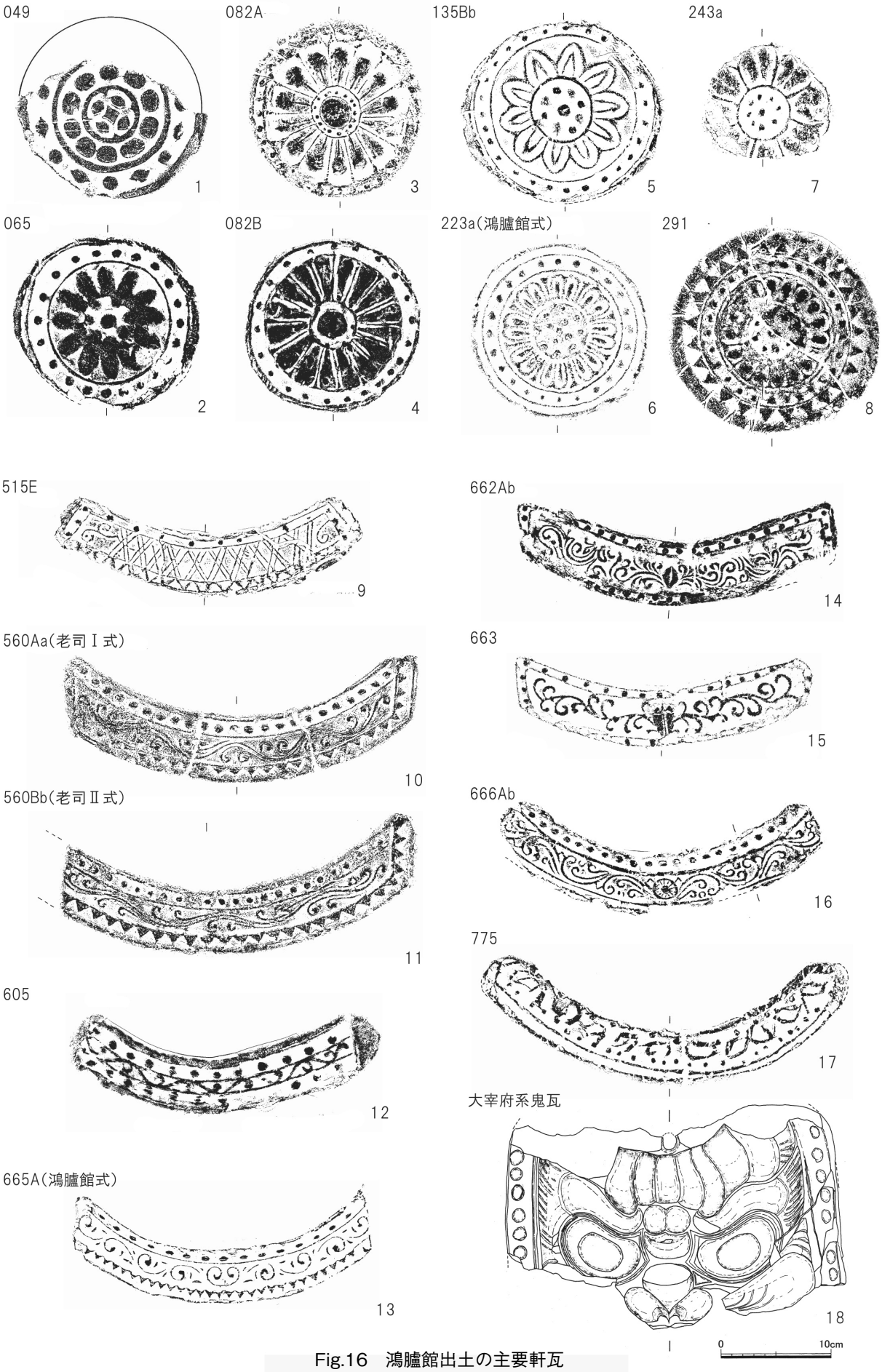


Fig.16　鴻臚館出土の主要軒瓦

軒丸瓦は創建瓦である鴻臚館式（223 型式）（6）が最も多く、その数は全体の約 70％を占め、ついで 082A 型式（3）約 10 数％、082B 型式（4）約 10％となる。その他の瓦はいずれも少数の出土に留まる。223 型式は複数の瓦范があり、細分類も試みられている。082A 型式、082B 型式は単弁素弁で、弁数や連珠文の相違から分類される。老司系の 291 型式（8）は北館から中央谷に流れ込む溝からまとまって出土している。065 型式（2）、135Bb 型式（5）、243a 型式（7）は西区女原瓦窯跡で焼成されたもので、第Ⅳ期の施設に使用されたものと考えられる。軒瓦の瓦当と丸瓦の接合技法や瓦当文様の特徴などから新羅の工人の関与が指摘されているものである。049 型式（1）は中央谷や北館で多く見られるもので、鴻臚館の最末期段階に使用された軒瓦と考えられる。

軒平瓦はやはり鴻臚館式（635 型式）（13）が最も多く（約 60％）、662 型式（14）（約 10 数％）、663 型式（15）（10 数％）がこれに続く。数量、及び胎土・色調からも 223 と 635 型式、082A と 662 型式、082B と 663 型式 の組み合わせとなり、鴻臚館の主たる軒先瓦である。560Ba 型式（11）は老司Ⅱ式で、老司系の軒丸瓦 291 型式と同様の出土状況にあり、基本的に北館のみに使用された型式である。605 型式（12）も南館では出土例がなく、北館のみに使用されたと考えられるもので、軒丸瓦 049 型式との組み合わせとなる。

文字瓦は「平井」「佐」「賀茂」「大国」「伊貴作瓦」「今行」「門司」などがある。このうち、「今行」「門司」は主に北館で出土するもので、瓦の敲打痕の特徴も北館でのみ見られるものがあり、ここでもⅣ期以降、南北の相違が看取される。

鬼瓦は大宰府系の鬼瓦（18）で、南館、北館とも出土している。幅 30cm ほどの小ぶりのものである。

② **木簡（Fig.17）**

木簡は便所状遺構 SK57、SK1124 から出土しているが、判読できるものは SK57 が主体である。木簡の形態は両側から切り込みが入る荷札形式のものが大半である。その内容から筑前国内の「京都郡」（1）や「鞍手郡」（6）、肥後国の「天草郡」（9）や讃岐国の「三木郡」（12）の米、「鹿乾脯」（2）（鹿の干し肉）や「魚鮨」（4）といった食材に付けられたもので、それらはこの場所で使われた物品であったと考えられる。

③ **貿易陶磁器（Fig.18）**

貿易陶磁器は第Ⅲ期段階になると、越州窯系青磁や邢窯系白磁、長沙窯水注などが出土するようになるが、出土量が増大するのは第Ⅳ期以降である。第Ⅳ期のもので主体となるのは越州窯系青磁である。越州窯系青磁は精製品と粗製品の二種類に大別され、前者が浙江省産（1 ～ 16 ほか）、後者が福建省産（17 ～ 24 ほか）と把握されている。鴻臚館跡出土品は前者をＡ類、後者をＢ類と分類され、胎土や釉色から細分されている。器種は碗や坏、水注や鉢などがあり、このほか、褐彩陶器の水注（33）や鉢（39）、褐釉陶器の灯盞（燈明皿）（41）や香炉（40）、無釉陶器の茶碾輪（薬研）（42）、朝鮮半島産無釉陶器（43）、定窯白磁（25）など多彩な製品が見られる。第Ⅴ期になると、景徳鎮窯白磁（56 ～ 61）が出現し、青磁は減少傾向となる。白磁は口縁を折り返して玉縁状にした碗や皿が主体となる。青磁は毛彫りや片彫りの劃花文を施した碗（46 ～ 49）や水注（52、53）など、前代には見られなかったものが出土している。

④ **新羅土器（Fig.19 － 1 ～ 5）**

新羅土器は第Ⅰ期、Ⅱ期に見られるもので、新羅使を迎えたことにも対応するようである。出土量は南館の方が多い傾向にあり、第Ⅱ期の南北の館の設置時期の差を反映しているのかもしれない。器種には印花文を施した坏蓋（1、2）、瓶（3、4）などが出土している。便所状遺構からは無文の樽型瓶（5）が出土している。

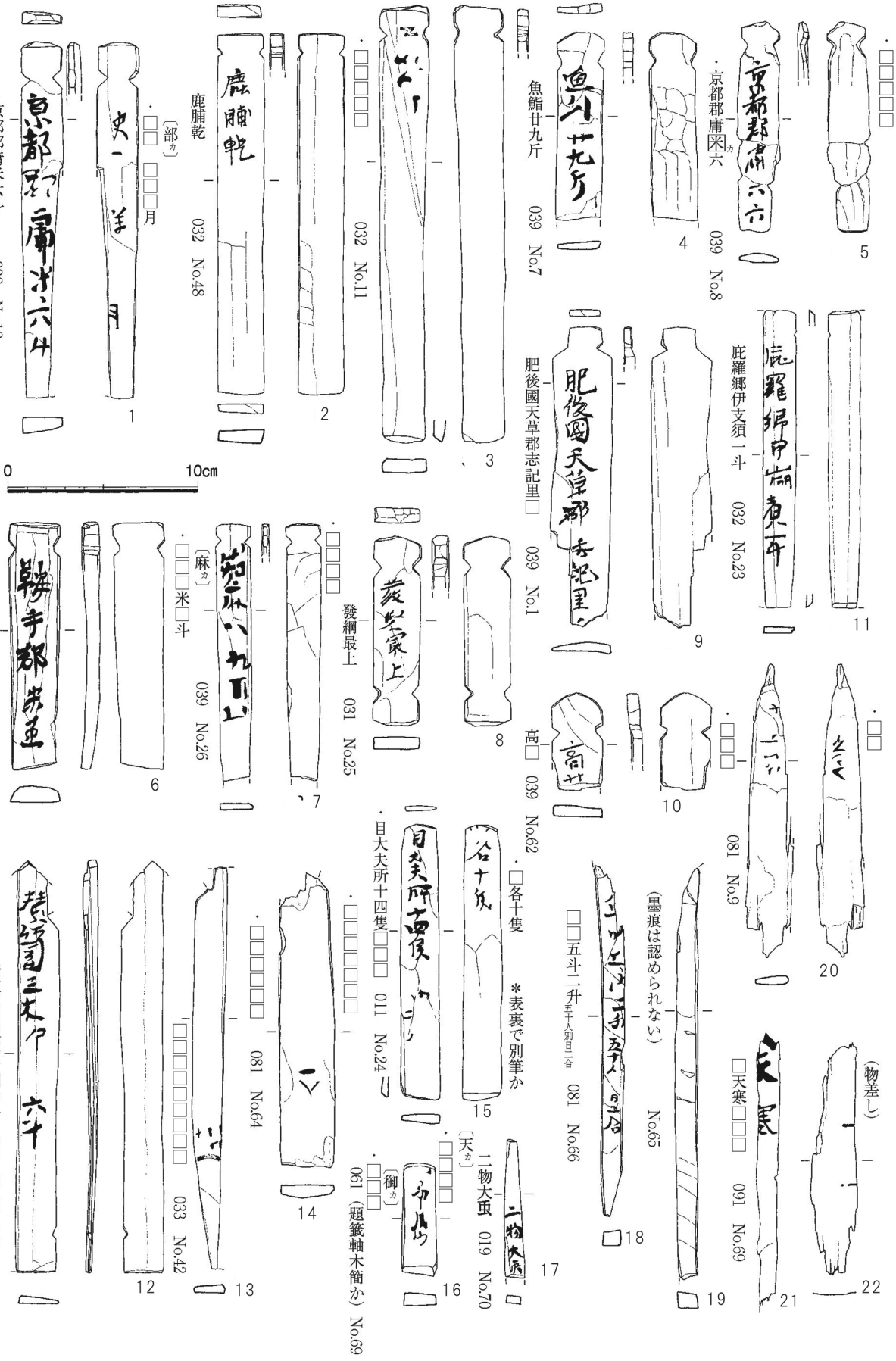


Fig.17　鴻臚館跡 SK57 出土の木簡

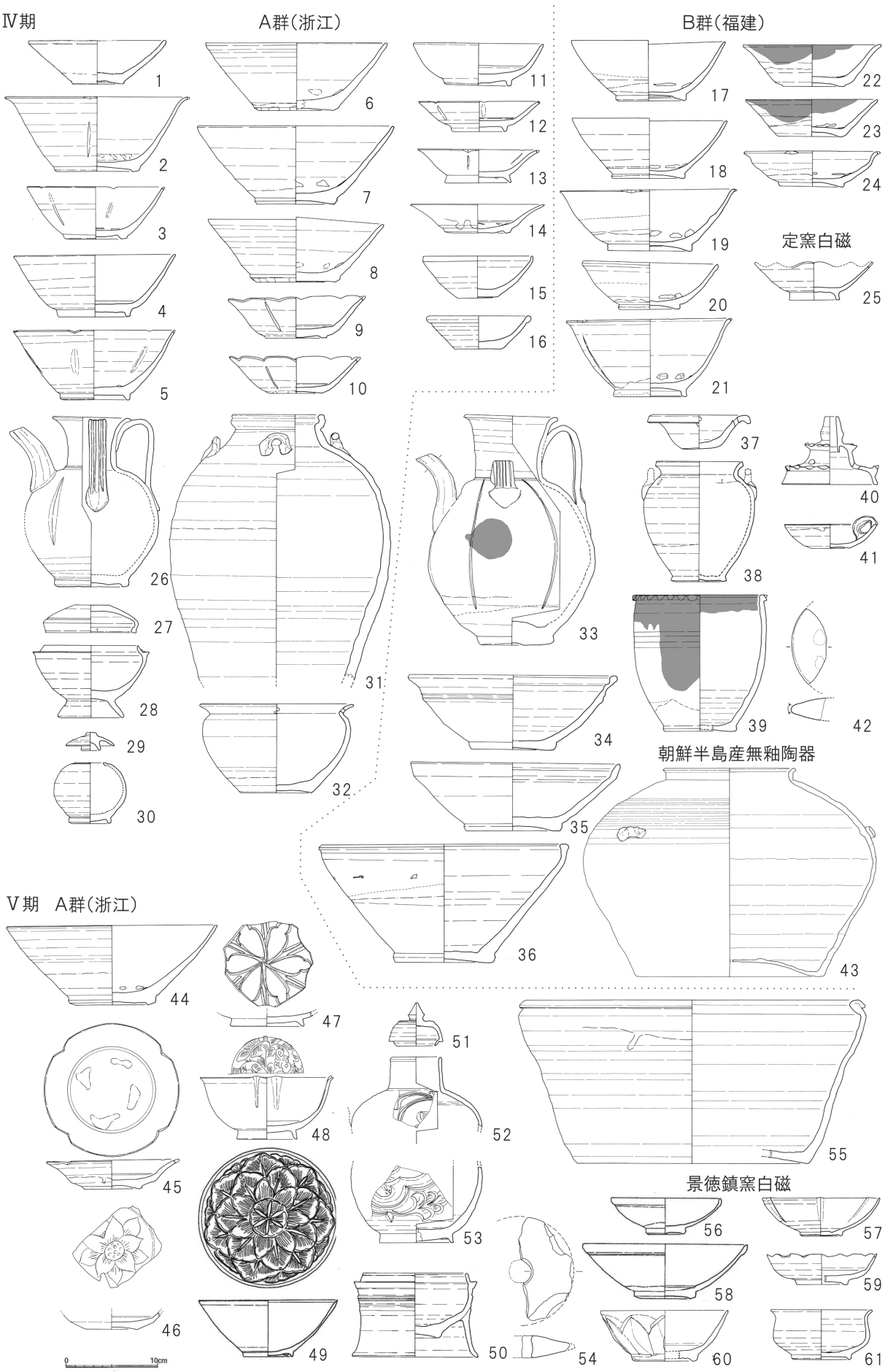


Fig.18　鴻臚館跡出土の第Ⅳ・Ⅴ期の貿易陶磁器

⑤　特殊な陶磁器、ガラス器（Fig.19 － 6 ～ 16）

越州窯系青磁は第Ⅲ期から見られるようになるが、鴻臚館跡では隋代の越州窯系青磁碗（6）が出土している。筒形をした円盤状高台の小碗で、外面のみ釉がかかる。出土遺構との時期差があり、持ち込まれた時期は特定できないが、希少なものである。

唐三彩の出土量は少ないが、形態が分かるものとしては三彩鴛鴦文陶枕（7）がある。鴛鴦を挟んで中央部分に青、他は緑釉が残るが、東京国立博物館蔵の同類製品の例から恐らく黄釉も使用されていたであろう。また、晩唐に比定される白化粧した白地に緑釉・黄釉で斑点を打つ盤（8）が出土している。

イスラム陶器は破片資料が大半であるが、外面に貼付文を施し、コバルトブルーの釉薬をかけた大型の壺（9 ～ 14）がある。イスラム系の商人の活動の拡大により中国にもたらされたものが、中国商人により持ち込まれたものと考えられている。

ガラス器は少量であるが、ワイングラス風もしくは瓶（15、16）のような形態のものが出土している。色調は透明、緑色を呈する。蛍光Ｘ線分析では西アジア系ソーダ石灰ガラスの特徴に類似する。

⑥　墨書土器、磚、針書漆器（Fig.19 － 17 ～ 21）

墨書土器の出土数は少ないが、「中」「伴」（17）「縣」（18）などを記した須恵器がある。中でも注目されるのが 8 世紀後半の皿の底部に「城」（19）と記されたもので、続日本紀の寶亀 3 年（772）年 11 月辛丑の条にある「罷筑紫営大津城監」の記述から存在が議論されている「大津城」に関連する可能性が指摘されている。10 世紀代に位置づけられる土師器碗では外底部に「厨」（20）と記されたものがある。磚（22）には表面に習字及び人物の頭部らしき絵画を描き、背面に婦人・馬などの絵画を描いたものがある。便所状遺構 SK57 から出土した漆器には「二坊」（21）と針書きしたものがあり、宿坊などの施設を示す資料として注目される。

⑦　墨書陶磁器（Fig.19 － 23 ～ 27）

貿易陶磁器は多量に出土したが、その中に外底部に墨書を記したものが少数だが存在する。越州窯系青磁に記したもの（23）（判読できないが）もあるが、大半は白磁碗、皿である。判読できるものでは、船主を示す「綱」（24）や「呉」（25）「李」（26）「鄭」（27）といった中国人名などがあり、12 世紀代に博多遺跡群で多く見られる墨書土器に類似するものであり、鴻臚館での交易に関わる中国商人の存在を示すものである。

⑧　硯、陶枕（Fig.19 － 28 ～ 31）

硯には海部の壁にあたる部分に軒平瓦様の文様が彫り込まれるもの（28）で、縁どりした内側に、珠文 7 個を浮彫りにしたものがある。中国産と考えられる風字硯は断面台形の脚が二つ付くもの（29）で、第Ⅲ期の遺構から出土している。陶枕には先に記述した唐三彩のもののほかに、長沙窯青緑釉のもの（30、31）がある。

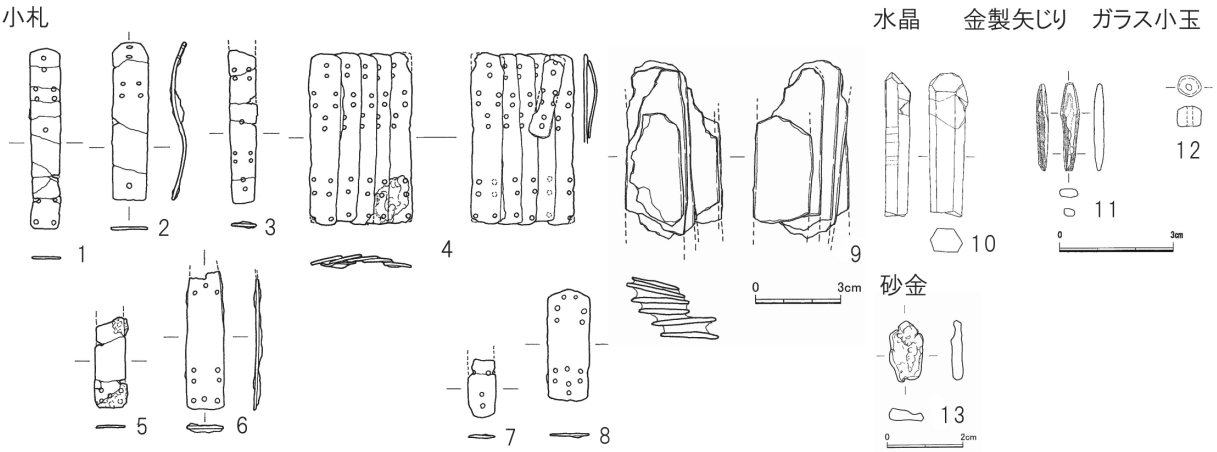
⑨　印章（Fig.19 － 32、33）

銅印は第Ⅴ期の包含層から出土したもので、方形の印面に「好」（32）の銘が正字で鋳出される。押印すると逆字となる。紐は莟紐で、印面の法量は 3.7㎝四方となる。滑石製の石印は第Ⅴ期の溝から出土したもので、「開」（33）の一字を刻み出す。紐は莟紐で、銅印の形態を忠実に模している。

⑩　石帯（Fig.19 － 34）

石帯はこれまでに 1 点出土したのみである。淡い緑色を呈するが石質は不明。裏面に 2 個の小孔からなる綴じ穴を 3 カ所に穿つ。潜り穴内には、銅線が残る。幅 4.2 ×高さ 2.8㎝を測る。

Fig.19　鴻臚館跡出土の主要遺物 1



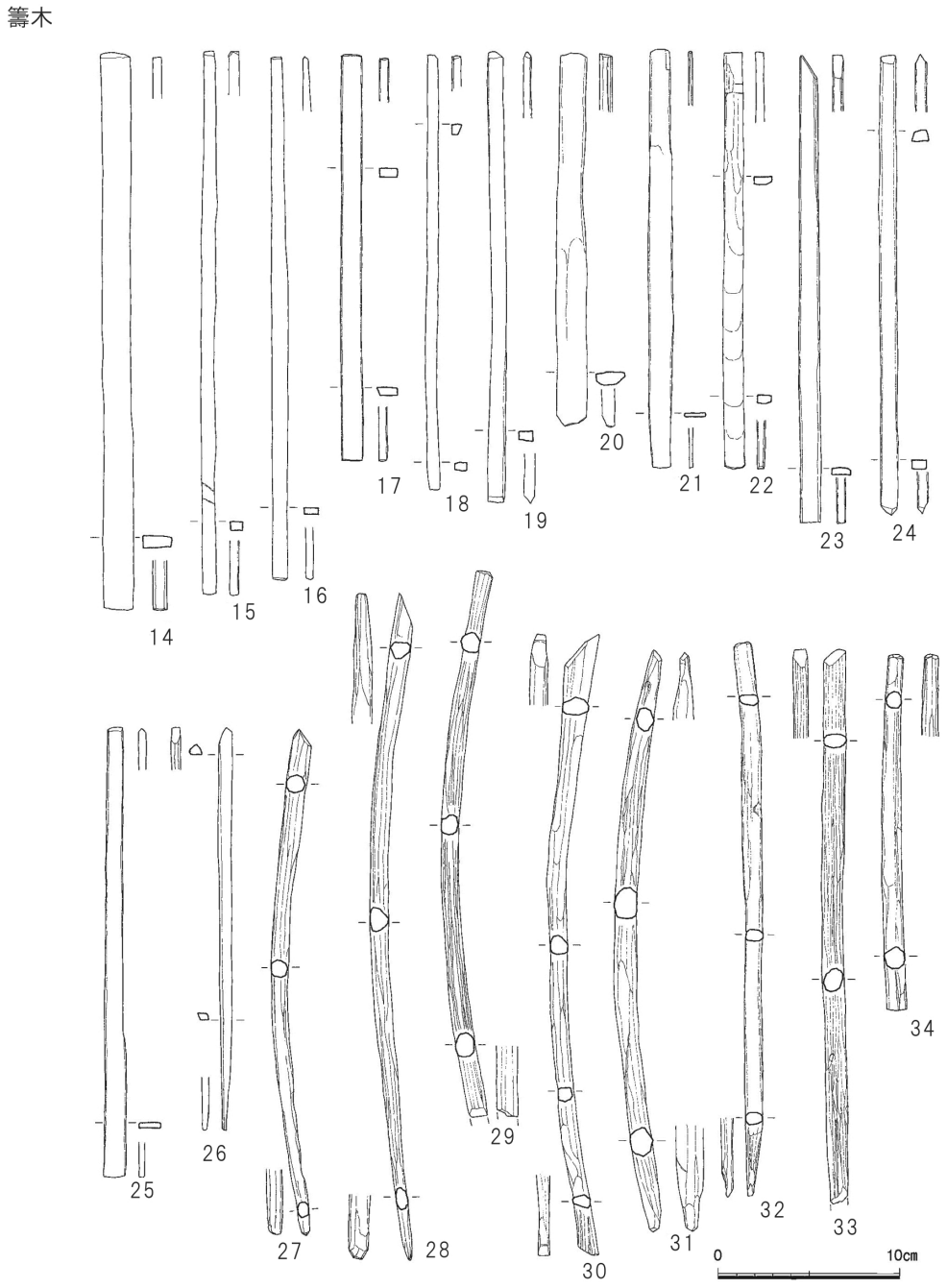


Fig.20　鴻臚館跡出土の主要遺物２

⑪　**小札（Fig.20 － 1 ～ 8）**

挂甲の鉄小札は重なった状態で十数点出土している。小札は、革紐等で綴じ合わせたものであろうが、紐は遺存していない。先に触れた貞観 11 年（869）の鴻臚館への甲冑の配備にも関わるものと注目される。

⑫　**特殊遺物（Fig.20 － 9 ～ 13）**

北館の第Ⅲ期の礎石建物北側で地鎮具と考えられる水晶（10）、金製矢じり（11）、ガラス小玉（12）が出土した。水晶は火打石として使用されるが、唐への朝貢品でもあった。金製矢じりは細長い棒状に成形した金塊をヤスリ状の工具で面取り整形したものである。約 85％が金、15％が銀である。

砂金（13）は商品の対価でもあり、鴻臚館での交易に関わる資料の可能性があるが、共伴遺物が少なく、年代を特定することはできない。長さ 16.08mm、幅 8.9mm、最大厚 3mm、重さ 2.75g を測る。99.5％の純度の高い金である。

⑬　**籌木（Fig.20 － 14 ～ 34）**

便所状遺構からは籌木が多量に出土している。概ね長さ 20 ～ 30㎝、幅 1.5㎝前後、厚さ約 5mm の大きさのものである。形態は割り箸状に粗く削ったものが一般的ではあるが、使用後の木簡を割って籌木に転用したものも多く見られる。

出土遺物を見ると、交易に関わる品々が目立つ一方で、官衙で特徴的な帯金具や墨書土器、国産の須恵器や土師器、緑釉陶磁器などの出土量は少ない。蕃客などの滞在施設であった施設の在り方を象徴するものと考えられる。

3．おわりに

鴻臚館は約 400 年間の存続期間の中で、対外関係の変化と連動して、施設の性格が変容しており、遺構や遺物からもそのことを窺うことができる。例えば、外交の施設であった第Ⅰ期、Ⅱ期の建物の様相や新羅土器などの在り方、本格的に交易の場となった第Ⅳ期以降の膨大な量の貿易陶磁器、更に新羅海賊の侵入などに対して、兵士や武器、兵馬等を配備して防備の強化を図った点、11 世紀中ごろ以降の遺構の消滅などがあげられる。

今後、鴻臚館に関しては隣接地や関連遺跡の調査による全容解明が待たれる。鴻臚館に付属したと考えられる倉庫や馬の厩舎、博多津の防備を行った「警固所」などについては考古学的に確認されておらず、これらの検証も鴻臚館の全容解明につながる課題と言える。

参考文献

吉武学 2012『鴻臚館跡 19 －南館部分の調査（1）』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1175 集
福岡市教育委員会

菅波正人他 2017『鴻臚館跡 23 －北館部分の調査（2）』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1326 集
福岡市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき　こうろかんあと
書　　名	史跡　鴻臚館跡
副 書 名	－総括概要編 －
巻　　次	鴻臚館跡 24
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1357 集
編 著 者 名	菅波　正人
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8－1　電話番号 092-711-4784
発行年月日	2018 年 3 月 26 日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきこうろかんあと 史跡鴻臚館跡・ しせきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	ふくおかしちゅうおうく 福岡市中央区 じょうない１－１ 城内１－１	40134	0192	33° 35′ 12″	130° 23′ 11″	871225 ～ 140328	(計 32,319)	範囲確認

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 石垣 布掘り塀 礎石建物 便所状遺構 溝 土坑 柱穴 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鉄製品 銅製品	古代の客館である鴻臚館 (筑紫館) 跡

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 24

― 総括概要編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1357 集

2018 年（平成 30 年）3 月 26 日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 － 1

印　刷　株式会社ソウヤマ印刷

福岡市博多区吉塚 4 丁目 3 番 18 号

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡24

―総括概要編―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一三五七集

二〇一八

福岡市教育委員会